

一 国史を越える政治外交史の模索 －退職にあたっての所感－

勝村 誠

Attempts for a Political and Diplomatic History Beyond the History of One Country: Thoughts on Retirement

KATSUMURA Makoto

Abstract

This essay is a memoir on the occasion of my retirement. Looking back, the first turning point in my life was my encounter with scientific socialism after I entered Chuo University, the second was a community survey in Tama City, Tokyo in the 1990s, and the third was the opportunity to study in Busan, Korea in 2004.

At the end of this memoir, I summarize my study and education on Japanese political and diplomatic history and describe my future prospects for my research life.

はじめに

私が1999年4月に立命館大学政策科学部に着任してから、はや24年の歳月が流れました。振りかえってみると実に短い時間であったと痛感します。立命館学園は「自由と清心」を建学の精神としていますが、なかでも政策科学部は新しい提案を歓迎する気風がひととき強い学部であると言えるでしょう。政策科学部における教育研究活動において私は、文字通り「自由」に振る舞うことを許していただいたものだと、つくづく思います。まずは、私にとってつねに寛容な同僚でいてくださった政策科学部の関係者のみなさん、そして、このような立派な論文集を発行してくださった政策科学会の関係者のみなさんに、定年退職を迎えるにあたり、この場を借りて、心より感謝申し上げます。

岸学部長からは定年退職を記念する最終講義を開催してはどうかという温かいお誘いをいただいたのですが、2022年度秋 semester の私の授業（戦後日本外交史）は月曜日の1時限に配

当されていたため、会場準備もご臨席も大変な負担になること、また当該授業を2023年度も私が担当するので文字通りの「最終講義」にはなり得ないこと、そしてなによりも、私の授業進行が遅いために最終講義に1回の授業を割くことが難しいことなどの個人的な事情により、ご厚意にお答えできず申し訳なかったのですが、お断りしました。そこで、この退職記念論文集には、最終講義に代えて、私のこれまでの歩みを振りかえる回想記を掲載させていただくことにしました。お時間のあるときにお付き合いいただければ幸いです。

生い立ちと家族について

私は1957年7月22日に母親の実家がある大阪府守口市の松下病院で生を受けました。父親の勝村達喜は1929年の同じく7月22日生まれで、広島県三原市の小さな材木屋を営む勝村重登の次男、母親の舟橋（旧姓）小枝子は大阪府守口市の京阪電鉄土居駅前にあった小さな町医者者の末娘でした。父親は国立大学の医学部をいくつか受験したそうですが、その折に両家を知る望月という人物から、土居の舟橋医院に挨拶に寄るよう言われたと聞いています。母はそのときに祖母から、お客さんが来るから和服に着替えてお茶を出すようにと言われ、本人たちは訳がわからないまま出会ったそうです。その後、ご縁に恵まれて、と言っていいのかどうかわかりませんが、父親がまだ岡山大学医学部で外科医学の修業中の身であったにもかかわらず、二人は結婚し、翌年に私が生まれました。

父親は私が4歳のときにアメリカ留学のチャンスに恵まれ、バーモント州立大学でマイクロサージャリー（ルーペや顕微鏡を用いた微細な外科手術）の修業をしてきたらしいのですが、家計に余裕がなかったため単身で渡米し、私たち（母・私・弟）は祖母が暮らす守口市の小さな家に転がり込みました。私は横浜港に父を見送りにいったことは微かに覚えているのですが、2年後に父親が日本に戻ってきて再会したときには「お父さんだよ」と言われてもピンと来ず、父親にちっとも懐かなかったので、父にとっては可愛くない子供だっただろうと思います。

父が帰国すると、一家は大阪から岡山に転居し、小学校・中学校は父親の考えによって岡山大学の附属校に通うことになりました。当時一家が暮らしていた岡山駅の西側にあった借家から岡山の市街地の東端に位置する学校まではかなり離れていたため、通学に時間を要して近所の子どもたちと遊ぶこともありませんでしたし、父親は家庭を全くと言っていいほど省みませんでした。私は母親には愛情を注いでもらったと思いますし、弟とも仲が良かったのですが、そういう生い立ちでしたから、私にとっては「幼なじみ」だとか「一家団欒」というものに全くと言っても過言ではないほど、縁がありませんでした。そのせいで、私の人格にはいろいろと欠落した部分や歪みがあるのだろうと自覚していますし、「家庭こそが社会の基本単位だ」などという保守勢力の言説には虫唾が走る思いです。あまり楽しいこともなかったせいか、小学校・中学校の記憶はほとんどありません。

「社会科学」との出会い

高校は地元の岡山県立岡山朝日高校に進学しました。よく言えば「自由」、悪く言えば「放ったらかし」の学校でしたので、伸び伸びと楽しく過ごしたと思います。高1のときの日本史の担当が後神俊文という先生で、1年かけて古代史だけ、邪馬台国論争とか白村江の戦いなどを何時間もかけてとても詳しく教えてもらったことは覚えているのですが、私は肝心の授業内容をちっとも理解できていませんでした。後神先生は京都大学文学部の出身で、若い頃は宮内省書陵部でも活躍されていたと聞いていますが、実は初期社会主義者の木下尚江の研究者であられるということを、最近になって知りました。クラス編成の成り行きで、後神先生に近現代まで教えてもらえなかったことは残念です。

大学受験は学校全体が「難関大学にチャレンジするのが当たり前」という雰囲気でしたので、私もご多分に漏れず実力不相応な受験をし、高3のときはどこにも受からず、1年の浪人生活の後に第3志望で中央大学法学部政治学科に合格し入学しました。大学に入学した頃は漠然とジャーナリストになりたいと思っていて、背伸びして英字新聞を購読したりもしましたが、ろくに読まず仕舞いでした。あまり真剣に受験勉強をしていなかったのも、「勉強づかれ」とか「遊びたいという欲求」はなく、大学生になったら真面目に勉強できるサークルに入りたいと思っていました。そんな頃、社会科学研究会というサークルの先輩がクラスの教室に新入生勧誘のビラまきに入ってきて、経済学、哲学、政治学を真剣に学ぶサークルだということで、「ともに学びましょう」と熱く語って去って行きました。その先輩は、かつて立命館大学国際関係学部におられ、いまは駒澤大学経済学部で金融論を教えている代田純教授なのですが、私は「ああいう真面目そうな先輩がいるサークルならばちゃんと勉強できるかもしれない」と思って、何日か後にビラに書いてあった地図を頼りに会室を訪ねたのでした。

入会してみると、社会科学研究会で学ぶ経済学は剰余価値学説を土台とするマルクス主義経済学、哲学は唯物論哲学、政治学とは当時は隆盛だったマルクス主義国家論、要するに社会科学＝「科学的社会主義」だったので、多少は面食らいもしたのですが、先輩方はみな優しくて面倒見もよかったので、私は徐々にそのサークルの活動にのめり込んでいきました。また、当時の中央大学は御茶ノ水駅の近くの神田駿河台にありましたが、一年後に多摩キャンパスに移転することが決まっていたけれど、まだ移転反対を唱える学生グループも存在していましたし、私が入学する二年前に学生自治会が再建されており、自治会支持派は大学から自治会の公認を求めて要求する一方、自治会公認阻止を訴えるグループもあり、対立状況を呈していました。そんななかで、社会科学研究会としても学内情勢についてサークルとしての声明文を出すことになったことがあり、おそらく私の年齢ぐらいが最後の世代だと思いますが、ガリ版の口原紙の切り方とか、謄写版印刷の方法などもそこで学びました。

当時の私とはいうと、岡山という根強い保守的風土に包まれて育ち、まだ社会経験も乏しかったと思いますが、そんな当時の幼い私の目には、「科学的社会主義」の世界観は混沌とした社会現象に対してスカッとした見通しを与えてくれる羅針盤のように映りました。社会科学研究

会で学んだ経験は、人類社会を総体的に認識しようという大きなパースペクティブを持つことの重要性を認識するきっかけになったと思います。

一方で、科学的社会主義に内包されている未来予測的な考え方にふれて、あくまで当時の幼い私にとってはということですが、ほんのわずかな入門書を読んだだけのくせに、なにやらまわりの学生たちが知らないことを知ったかのような優越感を抱いてしまったりもしました。本当に傲慢だったと思います。いまの私は「科学的社会主義者」ではありませんが、通俗的マルクス主義にはそのような魅力と傲慢さが同居していることを学ぶことができたのは良い経験でした。その経験が、私にとって最初の運命の分かれ道だったと、いまにして思います。

学生時代の恩師についてもふれておきたいと思います。3年生のゼミでは小林丈児先生にお世話になりました。小林先生には『政治学原論序説』（青木書店・1967年）という御著書があり、マルクス主義の立場からアメリカ政治学の巨匠とされる人物の学問的特徴を批判的に解説されていますが、当時はイギリス政治分析に励んでおられました。ゼミ生一人一人をよく見てくださる先生で、サークル活動のことや進路についても個人的に相談に乗っていただきました。1985年に61歳の若さで亡くなりましたが、後に遺著として『現代イギリス政治研究－福祉国家と新保守主義』（中央大学出版会・1989年）がまとめられています。

また、振りかえってみると本当に私は生意気な学生だったと思いますが、4年生のときには横浜市立大学の先生で中央大学法学部では「労働問題」という講義を担当しておられた斎藤秀雄先生に頼み込んで、正規履修生ではないのに斎藤ゼミ生に迎え入れていただきました。3年生のときに履修した斎藤先生の労働問題の授業に大きな刺激を受けて、すっかり「斎藤ファン」になったからなのですが、正規ゼミ生の3年生3人と私の4人だけの少人数ゼミでした。私は賃金論をテーマに定め、卒業論文では春闘の歴史についてまとめた記憶しています。

斎藤先生はとても庶民的で人懐っこい先生で、お宅にお招きいただいたり、ゼミ合宿には「今日は子守りの日に当たっちゃって」と、小学生の娘さんを連れてこられて一緒に遊んだり、進路のことで相談に乗ってもらったり、とてもお世話になりました。斎藤先生はゼミの時間に私たちに横浜における関東大震災や空襲のことをよく話しておられたのですが、先生が関東大震災後の横浜における朝鮮人虐殺の研究の先駆者であられたことを知ったのは先生がお亡くなりになった後でした。ご自分の業績のことをご自分からは仰らない先生でしたが、もっと食らいついてお話しを聞いておけばよかったと悔やまれます。

公務員として中学校の現場を体験する

中央大学は私が2年生になる1978年4月に神田駿河台から八王子市に移転しましたので、私は江戸川区小岩の下宿から、東京都多摩市の京王線聖蹟桜ヶ丘駅の近くのアパートに転居しました。卒業後の進路は地方公務員を志して受験をし、東京都職員試験に合格し、東京都庁で勤務できるかと思っていたのですが、最初に配属された職場は、奇遇にも同じ多摩市の中学校でした。多摩市にはえらくご縁があるものだなあと感じましたが、転居せず自転車通勤する

ことができたのはありがたかったです。

1981年に着任したのですが、当時は全国的に中学生が「荒れて」いる時期で、着任した学校は市内でも最も困難校だと言われており、ガラスの破壊や校舎の落書き、授業からのエスケープ、近隣の喫煙などが常態化していました。事務職員として事務室で勤務していた私もその状況に無縁ではいられず、事務室や用務員室からマジックインクやペンキなどを盗み出した生徒を追いかけて取り戻したり、夜まで残ってガラス屋さんなどの修繕工事を見守ったり、予算不足で工事契約ができなくなったときには、教頭先生や理科の先生と一緒に夜に校門の鉄門扉の溶接を手伝ったり、ガラスの代わりに窓にベニヤ板を張ったりと、なんでもやりました。本務では、給与、福利厚生、施設物品管理、契約など、現場におけるフロント（末端）の行政事務全般を経験させてもらいながら、教育現場の困難さを自らの目でみることで、貴重な経験ができたと思います。

いつしか、学校再建に向けて子どもたちと向き合っている先生たちと自然に懇意になっていったのですが、そんな渦中に「第一次教科書問題」が起きました。1981年から文部省（当時）の教科書検定における検定官の圧力が強まっていたのですが、翌1982年6月に主要メディアがそのことを一斉に報じて大きな社会的争点となりました。いわゆる「侵略⇒進出書き換え問題」です。そのときに、親しくしていた社会科、技術家庭科、美術科などの先生たちから「私たちはこの問題がよくわからないから勉強会をすることにしたので一緒に入ってもらえないか」と誘われて、私が発表することになりました。にわか勉強をして、どうにかこうにか、なにかを話したと記憶していますが、それが契機となって、自分が日本とアジアの近現代史に余りにも無知であることを自覚しましたし、遡って韓国の光州民衆抗争のことや、その後の全斗煥軍事独裁政権の民衆弾圧のことにも目を開かされました。

大学院のこと

中学校の現場には3年いましたが、少し将来のことを考えながら、今後の生き方を変える時間的・精神的余裕が欲しくなり、4年目に異動希望を出して、定時制高校の事務室に移してもらいました。そして、中央大学の科目等履修生になり、経済学部の金子貞吉先生が担当する「日本経済史」の講義や通信教育部の教職科目を履修し、大学院の受験勉強もしていました。幸運にも出身校である中央大学の大学院法学研究科政治学専攻に合格したので、職場の上司にも率直に相談し、少し勤務時間を弾力化することをお認めいただき、公務員5年目は大学院生として「二足の草鞋を履く」生活を始めました。

大学院の指導教員は「日本政治史」担当の金原左門先生で、金原ゼミのある火曜日は夕方出勤を認めていただき、それ以外のコースワークは午前中や土曜日の授業を履修しました。商学部の山中隆次先生のもとで初期マルクスについてのドイツ語の研究書を輪読したことや、当時は東京大学東洋文化研究所の教授であられた関寛治先生（後に、立命館大学国際関係学部教授）の「国際関係特論」の授業でのディスカッションのことはよく覚えています。関寛治先生から

は、訪朝体験とか、ピースボートで辻元清美さんと語り合ったことなどをお聞きしたのが印象に残っていますが、「あなたは日本政治史を専攻するのなら中国語とロシア語を勉強しなければいけないよ」と何度かアドバイスをいただきました。せっかくのご助言でしたのに、当時の私にはその含意が理解できず、全く耳を傾けなかったことは悔やまれます。土曜日には菅原彬邦先生のゼミで日本史籍協会の『木戸孝允日記』をコツコツと読む経験をさせてもらいました。

どうにか1年目のコースワークは履修できたのですが、「このままでは修士論文は書けそうもないな」と思い、パートナーにも認めてもらって、公務員を退職しました。当時はまだバブル経済絶頂期でしたし、大学院生たちはお互いに割のいいアルバイトを融通し合ったりしていたので、退職してもどうにかなるだろうと思ったのですが、いま思えば無謀なことをしたものです。公務員退職後は、予備校講師、専門学校講師、家庭教師、翻訳、古書店の店員など、さまざまな非正規労働に従事し、それぞれをそれなりに楽しみ、研究職に就けなくても、なにかしらの仕事で生計は立てられるだろうと楽天的に生きていました。

指導教員の金原左門先生はアメリカの日本近代化論を批判的に検討されたことで知られており、日本政治史では大正デモクラシーに関する業績が豊富な方でしたが、歴史学の新潮流に鋭くアンテナを張っている方でした。また、地域史、民衆史、女性史などの歴史学の新領域においても活躍されており、大学院の金原ゼミでは歴史学方法論に関する論文や著作を次々と検討していました。金原先生は大学院時代に奈良県の地域調査にかかわったことが研究の原点となっているとのことで、つねに地域にこだわりをもっている方でもあり、茨城県史をはじめ多くの自治体の県史や市町村史の仕事を手がけておられました。金原先生の地域史論は700ページを超える大著『地域をなぜ問い続けるかー近代日本再構成の試み』(中央大学出版会・1987年)にまとめられています。「地域の窓から世界をよく見ればだいたいのはわかる」とよく仰っていたことを記憶しています。

私が博士後期課程に在学していた1990年代初め頃から、中央大学大学院にも国際化の波が押し寄せ、韓国・中国・アメリカなどの諸国からの留学生が金原ゼミに参加するようになりました。特に韓国人留学生の場合には、博士後期課程に進学し博士号取得を目指す人も多かったので、それが中央大学の大学院教育に対して刺激剤になったように思います。例えば、私たちの場合には、1989年に修士論文を提出したときに、金原先生から博士後期課程への進学をそれとなく促されましたが、博士論文の執筆構想を求められることはただの一度もありませんでした。一方で、韓国人留学生たちは、絶対に3年間で博士学位を取らなければならないとの決意を固めていましたので、そんな留学生たちを受け入れ始めた先生方も、おそらく困惑されながら対応されたことと思います。それはともかくとしても、それまで全くドメスティックな環境で生きてきた私にとっては、留学生たちの姿勢や発想から学ぶことは多々ありました。特に、独島＝竹島問題に取り組んだ崔長根さん(現・大邱大学校教授)や、大陸浪人の研究に取り組んでいた蔡洙道さん(現・慶北大学校教授)とのディスカッションを通じて、国家なるものに対するスタンスの違いを認識することができたのは有意義であったと思います。

私自身の研究のスタートについてふれておくと、私はもともと労働運動に関心があったので、

第一次世界大戦後の時期、すなわち、日本でも「改造の時代」と言われ、ヨーロッパの人道主義や社会主義の思想が紹介され、労働運動も盛んになる時期に焦点を当てることにしました。「改造の時代」の思潮や運動は、当時の日本政治にはどのような影響を与えたのか、それは現在にもつながっているのかを検証してみようなどと、大それたことを考えて、修士論文では加藤勘十に注目した人物研究に取り組みました。加藤勘十は日本大学弁論部の苦学生から書生になった政治青年でしたが、シベリア出兵に従軍したことをきっかけに反戦主義者になり、後に鉱山労働運動家に転身した人物ですが、加藤勘十が書生から労働運動家へと転身する時期の東京における新聞印刷労働者の労働運動への関わり方を取り上げました。修士論文の完成には4年を費やし、博士後期課程進学後もなかなか研究成果の公表に至らない日々が続きました。

ある日のこと、そんな私を見るに見かねたのでしょうか。金原先生から呼び止められ「君はなんだか忙しそうにしているけれど、何をしているんだ」と問い詰められる機会がありました。そこで実情を率直に話したところ、「もっと将来を見据えて自分のキャリアを積む仕事をしなければだめだろう。私は多摩市史の編集委員に就任することになったので、その仕事をやってみないか」というお話をいただき、多摩市史編さん専門調査員というお役目をいただきました。奇縁は続くもので、それが私にとっては三度目の多摩市とのご縁となりました。

多摩市史編さん室時代

多摩市史編さん室では、まず、自分自身と文学部史学科出身者とのスキルの差を痛感することになりました。出勤初日に明治大学の博士課程に在学中の先輩と打ち合わせをしたのですが、「勝村さんにはなにをやってもらいましょうかねえ」という話しから始まって、「近世文書の翻刻はできますか」、「文書の写真撮影の経験はありますか」などなどの矢継ぎ早の質問に、すべて「できません」と答えていたら、「じゃ、仕方がないから新聞の切り抜きでもやってください」と言われて、とても情けない思いをしたことは鮮明に覚えています。その地道な作業にかかわったことが後々には有益だったのですが。

また、金原先生からは「多摩市史編さん室の現場には明治大学、一橋大学、東京都立大学などからいろいろな研究者が来るから、その人たちには自分の専門分野で活躍してもらおうので、君はみんながやらない分野を引き受けるように」というお達しを受けていました。例えば、東京都立大学の大学院生だった畔上直樹さん（現・上越教育大学教授）は、明治期の文化や宗教を主に担当する、大正期は誰それさん、昭和戦前期は誰それさん、といった具合で、次々と担当者が決まっていきましたが、現代の担当を希望する人が誰もいなかったので、私が現代史のチーフのような役割を担当することになりました。当時の多摩市にとって、1960年代以降の急速な住宅都市化や、多摩ニュータウン開発とそれに伴う地域の変容は重大な 이슈でしたので、私にとって現代史担当になったことは、結果的には幸運だったと、いまにして思います。

多摩市史編さん室では本当にいろいろな経験をさせてもらいました。新聞調査の成果は『多摩市史関係新聞記事目録』（多摩市・1995年）という冊子として刊行されましたが、その制作

と解題執筆を通して、東京都の南西部の小さな山村が高度経済成長期に急速に変容する過程を概観することができましたし、議会議事録の調査からは、地域有力者の動きを知ることができました。多摩ニュータウン開発は、私が調査に入ったときにはまだ進行中でしたが、すでに東京都や日本住宅公団（当時）が多くの刊行物をまとめており、学術論文もいくつか発表されていました。私は当初はそのような成果を適切にまとめれば仕事は簡単に終わるかなと高をくくっていたのですが、開発推進側のまとめを読むと、開発の成果や積極面が余りにも強調されており、多摩市で学校事務職員をしていたときに得た地域イメージとのズレも感じましたし、開発には光があれば必ず影もあるだろうとも思い、実際に地域を歩き回り、関係者のインタビュー調査など、やりたいことを自由にやらせていただきました。

多摩市史の調査でいちばん印象に残っているのは土地を奪われて転業せざるをえなかった農業者のことです。最初に聞き取り調査にうかがったのは峰岸松三さんという方で、専業農家から団地内の書店に転業した方でした。午後3時ぐらいにお宅にお邪魔したのですが、お話しは止めどなく続き、どっぴりと日が暮れた頃に「あ、もうこんな時間か」とお気づきになるほどでした。おそらく4時間ぐらいぶっ続けでお話になったのだと思いますが、ご自分で資料をしっかりと整理され、体験記を大学ノートにまとめておられ、その後も何度もお目にかかりました。峰岸さんの場合は40代の頃にご自身が耕作する農地が多摩ニュータウンの用地買収の対象となったのですが、その時期はちょうど野菜作りが軌道に乗り、農業経営に自信を持ち始めた頃で、急に農業を辞めると言われて途方に暮れたことを切々と語ってくださいました。この開発は、一家がなんとか安定した収入を得られる程度の中規模農家にとっては、先祖代々受けついで土地を手放し転業することを迫られる厳しいものだったのです。

もちろん、「役所から来るモンに話すことなんかない」と門前払いされることも何度もありましたし、空振りもたくさんしましたけれど、私はいつしかすっかり多摩ニュータウン開発の「裏面史」研究みたいな作業に没頭するようになりました。それまで本格的な地域調査など経験したことがなく、にわか勉強で地理学、社会学、人類学などの地域調査法の入門書を眺めては現場に出かけるという日々でしたけれど、本当にいい経験をしたと思います。失敗を重ねながら、調査研究でかわりをもつ相手方との信頼関係（ラポール）を築くことがいかに大切かを知ることができました。

『多摩市史』を本としてまとめるころには、市役所のなかには多摩ニュータウン開発を批判的に描くことに抵抗感を示す向きもあったのですが、ちゃんと手続きを踏んで元農家の多摩市民の方から提供を受けた写真・資料や、聞き取ったインタビューに基づいているのであるから、ここに真実があるのだと主張して、『多摩市史 通史編二 近現代』（多摩市・1999年）の刊行にあたっては、1000ページほどの分厚い本のなか、150ページぐらいの分量で、土地を手放さなければならなかった方の経験や思いなども盛り込んで、かなり自由に書かせていただきました。

この論文集には「略歴・業績目録」を掲載していただきまして、そこに多摩ニュータウン研究に関する論文のことも載せてもらっているのですが、振りかえてみると、私は本当に恵まれていたと思います。多摩市史編さん室では調査員としての賃金をいただきながら、まだ研究

者が誰も見ていない行政文書を自由に見ることができ、東京都公文書館の資料調査や、前述したような調査も自分でやりたいように企画して自由にさせていただき、それをベースに『多摩市史』を執筆するとともに、自分の時間を使って調査の成果を自分の論文にも書かせていただくことができました。本当にありがたいことで、当時の関係者のみなさんには感謝しかありません。多摩市史編さん室の経験は私にとって、中央大学社会科学研究会との出会いに次ぐ、第二の大きな転機であったと思います。

多摩市史編さん室の仕事は1998年度で完了することがわかっていましたので、1995年に大学院の学籍を失った頃からは、その後はどう生きようかということを考えていました。1997年3月には、中央大学総合政策科学部の細野助博先生や大妻女子大学社会情報学部の炭谷晃男先生らを中心に建築関係などの実務家も加わって、多摩ニュータウン学会という学会が設立されたのですが、私もそこに入会させていただき、第1回の研究大会で発表させていただき、学会誌の創刊号に投稿論文を載せていただいたりしていました。その学会の懇親会は異業種交流会のような雰囲気、多摩ニュータウン地域で活躍している多分野の関係者のみなさんとも親しくなったので、大学の非常勤講師をしながら起業するのもいいかなと考えていましたし、古書店の仕事にも関心を持っていました。

一方で、専任の大学の教員になれる可能性などほぼないと思いつつも、公募にアプライしてみたりもしていました。自分でも、自分はどこまで幸運な人間なのだろうと思いますが、多摩市史編さん事業に区切りが付いた1999年の4月に立命館大学政策科学部にポストを得ることができました。金原先生にそのことを報告に行きましたところ、「君が多摩でやって来たことをいっそう深めてできるだけ早く博士論文にまとめなさい」との助言をいただきましたが、それは果たせぬままに先生はこの世を去られました。

私は、多摩市史編さん室で仕事をしていたときに書き散らした論文等を発展させることなく、結局そのまま放置してしまいました。当時、多摩市立複合文化施設（パルテノン多摩）博物館部門の学芸員をなさっていた金子淳さんが、私の調査研究のスタイルに共鳴くださり、多摩ニュータウン開発史の特別展の展示図録に概説を執筆させてもらったり、特別企画にゲストスピーカーとしてお招きいただいたりしていました。いま金子淳さんは多摩ニュータウンに近接する桜美林大学のリベラルアーツ学群教授として博物館学を教えておられますが、郊外・ニュータウン研究も手がけておられ、『ニュータウンの社会史』（青弓社・2017年）という本で、私が書きっぱなしにしたものを先行研究として吸収しつつ、より研究を発展させて、その成果をまとめて公表されています。金子淳さんにはこの場を借りて心から感謝申し上げます。

立命館大学政策科学部に着任して

1999年に政策科学部に着任して24年が過ぎましたが、初めて教壇に立った日のことはいまでも昨日のこのように鮮明に記憶しています。「政治学基礎1」という講義科目のほかにコンピュータリテラシーの基礎科目も担当しました。また、私が着任した当時は、先輩の村山皓先

生が学内の地域情報研究センターで「公私連携プロジェクト」を構想しておられ、「政策科学部はシンクタンクの役割を担う研究を推進しなければならない」、「自治体からの受託研究を受けて積極的にアウトプットを返せるような学部・研究科になるべきだ」と主張しておられ、私もそのプロジェクトにお声かけいただき、村山先生の運転する車で京都府内のすべての市町村役場を訪問したと記憶しています。とても刺激的な日々で、様々な企画にかかわりましたが、自分はここでいったい何を研究するのかを見失っていた時期だったようにも思います。

着任して3年ほど過ぎて、少し職場にも慣れて気持ちが落ち着いてきた頃に、修士論文を書いたまま放置していた第一次世界大戦後の社会運動の研究に戻ってみようと考えて、加藤勘十とその周辺の人物について再び調べ始めたのですが、加藤勘十と同じく新聞記者出身で、1919年の東京市電争議で全線ストライキを指導して検挙された中西伊之助という人物に興味を持つようになりました。2002年頃のことだと思います。

やがて、中西伊之助という作家が『楮土に芽ぐむもの』（1922年・改造社）という小説を書いていることを知り、最初は同一人物だとは思っていませんでしたが、その小説を取り寄せて読んでみて、労働運動家の中西伊之助と同一人物であることを確認するとともに、その内容に大きな衝撃を受けました。その小説は、今日でも、日本で初めて長編小説で日本の朝鮮植民地支配を批判的に描いた作品であると評価されていますが、彼が描いているのは「韓国併合」後の平壤で跋扈していた日本人たちの非道な姿でした。当時の日本にこれほどまでに朝鮮を深く理解している人がいるということを知り、驚いたのですが、それが私の心に朝鮮植民地支配のことが突き刺さったひとつのきっかけであったと思います。その頃に、2004年度に学外研究の機会をいただけることが決まっていたので、単純すぎますが、自分も中西のように朝鮮半島から日本を見ようと考えて、朝鮮語の勉強を始めました。

学外研究期間には、前述の崔長根さんにも相談に乗ってもらったりして、釜山の東亜大学校に受け入れていただきました。その決断には、ソウルで勉強してきた日本人は多いので、違う土地で暮らしてみようという私の生来の天邪鬼な性格も働いたと思います。6ヶ月という短い期間でしたけれど、釜山で暮らしたことが私にとって大きな人生の転機になりました。東亜大学校の崔仁宅教授にお世話になって西区東大新洞にある小さなアパートを借りたのですが、そこはかつて植民地時代に日本人たちが暮らしていたエリアでした。

多摩市史の仕事で地域を歩き回ることは慣れていたので、釜山のあちこちを訪ね回りましたが、釜山には豊臣秀吉の朝鮮侵略のときの倭城の跡もありますし、江戸時代の倭館の跡もあり、日本との関係が深い地域ですけれども、1875年の江華島事件をきっかけにできた日本人居留地の痕跡も確認できますし、その後、港湾・鉄道・都市計画など、近代都市としては、ほぼ完全なる植民地都市として日本によって建設されたことが古地図をみながら歩くたびに、ヒリヒリと伝わってきました。1876年の日本人居留地への日本人植民から始まって、1910年の「日韓併合」時にはすでに18万人もの日本人植民者が朝鮮に在留していた、すなわち下からの日本人植民者による植民地化が先行していたという事実は、朝鮮植民地支配の歴史の「イロハのイ」の常識ではありますが、現地で痕跡を確認しながらそのことを認識できたことは私

にとって貴重な経験でした。

立命館大学コリア研究センターの設立にかかわる

6ヶ月の短くも濃密な釜山生活を終えて、2004年の秋にはまた日常に戻っていたのですが、ある日突然、個人研究室に電話がかかってきました。当時、法学部教授でいらっしゃった徐勝先生からでした。「勝村さん、なに、あなた、私になにも言わず、韓国で勉強して来られたそうですね？お話ししたいことがあるので一度お時間をいただけませんか」とのことで、実は、私はそのときまで一度も徐勝先生とは個人的に話したことがなかったのですけれど、とにかく会うことになりました。そこで、立命館に朝鮮半島のことを研究する研究機関を設立できる見通しがついたので協力していただけないかというお誘いをいただき、私としても喜んでかかわらせていただくと承り、2005年5月の立命館大学コリア研究センターの設立に事務局長として関わらせていただきました。これもいま思えば、2004年の釜山体験と合わせて、第三の人生の転換点だったと思います。多くの韓国の大学と学術交流を推進することができました。2011年度からは私がセンター長を引き継ぎましたが、いまだにセンター長を続けておりまして、いくらなんでも長くやり過ぎましたので、2025年度には次の方に引き継ぎたいと考えています。

また、こちらも徐勝先生からご紹介をいただいたのですが、「東アジア大学生平和人権キャンプ」という取り組みに2007年から参加させていただいています。この行事は韓国のソウル大学校、済州大学校、全南大学校、東亜大学校と、日本の立命館大学、立命館アジア太平洋大学などの学生が、輪番でホストを務めながら年に2回集まって、国家暴力の現場を訪ねながら東アジアの近現代史を学ぶ学生ワークショップなのですが、私はこのキャンプに参加させてもらい、韓国では、朝鮮戦争のときの民間人虐殺、麗水・順天事件、済州島四・三事件、光州民衆抗争などの現場を訪ね、遺族や関係者、研究者のお話しをうかがうことができ、もともとは門外漢ですが、韓国現代史における国家暴力の凄まじさをリアルに知ることができました。一方で、日本で開催するときには、在日朝鮮人集住地域を訪ねたり、日本の植民地支配や戦争の加害と被害の痕跡を留める場でフィールドワークをして討論を深めました。この行事は2019年の夏に釜山で開催したのを最後に、コロナ禍もあって、いまは途絶えているのが残念ですが、学生たちにとっても日韓の相互理解を深める場となりましたし、きわめて意義のあるプログラムだと思いますので、きちんと成果を残して、次の世代に参考にしてもらえようと思います。

一国史を越えるとは

ここまで、私が現時点で作り上げた物語なのかもしれませんが、大学時代の第一の転換点、多摩市における第二の転換点、韓国生活を通じた第三の転換点を回想してきました。その後の私は、2010年度に釜山の東亜大学校において二度目の学外研究の機会をいただき、2019年度

にも一年間の学外研究期間をいただき、8月・9月には中国吉林省延辺朝鮮人自治州の延辺大学に、2020年2月・3月には韓国の忠清南道天安市の独立記念館韓国独立運動史研究所に受け入れていただき、勉強させていただきました。その間にお世話になったみなさま方に、心から感謝申し上げます。

この回想記には「一国史を越える政治外交史の模索」などと、ずいぶん大げさなタイトルを付けてしまいました。実は、まだぜんぜん「越えられて」などいないのですけれど、ここまで綴ってきた通り、私はもともと大学院時代に人物史や地域史の勉強からスタートし、そして立命館大学に着任してから 코리아 とのご縁ができました。例えば、もともと日本政治外交史を研究したい人で、どの大学とは言いませんが、もっとエリート養成に力を入れているような大学で研究者になるべく研鑽を積んだ人であれば、私とは全く異なるアカデミック・キャリアを積むのだと思います。もっともっと読むべき史料がありますし、調査に行くべき機関もあるでしょう。ここまで綴ってきた通りで、私にはそういうキャリアがスポッと抜けています。

私自身は、政策科学部に着任した頃は、前述の通り、政治学の基礎科目や情報実習科目を担当していましたが、何度かのカリキュラム改革を経て「日本政治史」を担当するようになり、2020年度からはその科目内容をリニューアルするとともに、「戦後日本外交史」も担当させていただくようになりました。近代日本の大学教育史を振りかえるならば、「政治史」「外交史」課目の源流は東京大学法学部の前身である帝国大学法学部に講座制が導入された1893（明治26）年の「政治学・政治史講座」の発足に遡るとされます。1900年には「政治学講座」と「政治史講座」が分割され、1906年には「外交史講座」が発足しました。このように「政治史」「外交史」はエリート養成のための基礎的学問分野として長い歴史を有していると言えます。

また、歴史の長い私立大学の法学部政治学科や政治経済学部政治学科においても、かつては「日本政治史」は「花形科目」であった時代がありました。政治学徒として、目の前の政治現象を見つめ、あるべき政治の未来像を構想するときに、日本政治の来し方を顧みることなく行く末を見通すことなどできないという暗黙の前提があったのだらうと思います。

以上のようなことを踏まえ、私が「日本政治史」や「戦後日本外交史」を担当するようになってからを振りかえてみると、立命館大学の政策科学部における政治外交史の研究教育はいかにあるべきかという問いは、つねに私につきまわっていたように思います。そして、ここまでのお話しは、それでも私にとっての政治外交史はこのようなものにならざるを得なかったという来歴の独白、いや言い訳に過ぎないと思います。

それでも、私が模索してきたことを少し表現しておくならば、私の場合、まずは地域史をベースにし、後に東アジアへも眼を開いたと言うことで、国民国家（nation-state）の枠組みの内側の小さな地域と、その枠組みを越えて拡張させたより広い地域とを、言わば伸縮自在に広げたり縮めたりしながら日本の政治外交を考えてみようというような問題提起を、いま学生には問いかけているところです。立命館大学政策科学部の入学生は、多様な入試方式を経て入学してきますので、高校の日本史・世界史の既習知識には大きなバラツキがあります。しかしながら、基礎学力は十分に備えていますし、学習意欲も高く、受講態度はとても真摯なものです。それ

を前提に、政策科学部の「日本政治史」と「戦後日本外交史」の授業のコンセプトを、私は近年、以下のように考えてきました。

第一は、東アジアのなかで日本近現代史を総合的に把握する歴史像を提示することです。すなわち、高校日本史・世界史の既習知識を基礎としつつ、それらを総合して、学生の空間的・時間的認識の拡張をはかることに心がけてきました。

第二に、政治外交史を立命館大学政策科学部の基本科目として位置づけて、政治学と歴史学の基礎教育を担うことです。政策科学の基礎ディシプリンとして政治学と歴史学を据え、その基礎を教授することをねらいとしています。それは政策科学の一つの下位領域として「歴史政策科学」という領域を位置づける営為でもあります。

第三に、まだまだ道は半ばではありますが、批判的・総合的社会科学としての日本政治外交史の確立を志しています。政治外交史の研究者は総じて保守的リアリストが多いと思いますが、それに対抗する授業を模索しています。

第四に、平和学・平和研究と接続する平和教育として日本政治外交史の講義を展開すべく、「戦争と平和」の課題を正面に据えて授業を展開してきましたし、これからもそうしていく所存です。そして、現代の平和と人権をめぐる諸課題との接続に心がけ、学生には、日々生起する国内・国際情勢への関心を喚起して、それを歴史的に読み解く手法をともに考えていきたいと希望しています。

このような観点から、2022年度の日本政治史の授業では、アヘン戦争から説き起こして、どうにかこうにか日本の敗戦までを扱うことができました。コロナ禍でオンライン授業が増えてからは、可能な範囲で有益な映像を探し出し、一緒に鑑賞しながら考える授業にも取り組んでおり、これからも担当できる限りは更に授業をブラッシュアップしていきたいと思っています。

むすびにかえて

私は2023年3月末で定年退職を迎えましたが、ありがたいことに、引き続き再任用していただき、政策科学部教授として働き続ける機会をいただきました。また、立命館大学国際平和ミュージアムのメディア・資料セクター長という役職を拝命し、特命教授となることになりました。私自身は、10年ぐらい前には、定年退職までには自分の研究の集大成として単著を世に問わねばとか思っていました。恥ずかしながらそれは果たせませんでしたけれど、幸いにも時間的余裕をいただいたのだと解釈しています。

そこで、この場を借りて、私の今後の課題を整理しておきますと、第一に、私なりの日本政治外交史を何らかの形でまとめること、第二に、この回想記ではふれられませんが、業績一覧に記載されているように、私は韓国独立運動家の安重根についても日本語で文章を書いてきましたので、韓国側の安重根研究の到達点をしっかり整理したうえで、日本でなにを研究すべきかを明らかにし、新たな研究の地平を切り拓いていきたいと思っています。そのさいに、第三に、朝鮮独立運動史研究と日本植民地支配（日本統治）研究との相克を描きだして行きたい

と思いますし、第四に、近年提起されている「犠牲者意識ナショナリズム」論を受け止めつつ、それをどう消化していくのかを考えていきたいと思います。

最後に、歴史認識問題や記憶の再生をめぐる課題については、国際平和ミュージアムのお仕事に関わらせていただくことになりましたし、3年前からウトロ平和祈念館の運営にも関わらせていただいていますので、今後は東アジアや世界各地の平和と人権に関わる博物館を訪ね歩いて、記憶の再生の在り方について、考え続けていきたいと思います。また、京都歴史教育者協議会にもかかわっていますので、小・中・高・大の校種を越えた歴史教育者の連帯や、日韓中の歴史教育者の交流にも力を入れていきたいと思います。幸い、いまのところ健康には恵まれているようですので、もうしばらくは現役で奮闘する所存です。どうぞ、みなさま、今後とも末永くよろしく願いいたします。